

羽根田さんのこと

安 藤 元 雄

羽根田俊治先生は、温厚で穏やかな人柄だった。気の短い私などが、何かの話題を勢いこんで持ちかけたりすると、羽根田さんはにこにこ聞き取ってから、一息おいて、わかりました、ではこうしましょう、といった返事をされるのだが、その、間の取り方にも、返事の口調にも、何とも言えないゆったりとしたリズムがあつて、こちらの短兵急な意気込みが柔らかく受け止められ、それほど慌てることもない問題だったかのように思えて来るのだった。

長いこと学部的一般教育主任をつとめられた、そのご苦勞のほどはまことに申しわけがないのだが、持ち前の穏やかさのおかげで、面倒な私たちの意見調整がどれほどスムーズに運んだかわからない。その多端なつとめを果たされたあと、休みを取られてしばらくお目にかからなくなっていたかと思ったら、ご病気との噂が聞こえ、それもかなり重いようだとの噂になって、お見舞いをする間もなく、亡くなられたとの知らせが来た。同じ外国語の担当ではあっても専攻の違った私などには、何だかあつけないほどのお別れになってしまった。

羽根田先生の学問上の業績については、畑違いの私には論ずる資格がない。ただ。音楽への深い造詣と、オーディオ機器についての専門的な知識については、いろいろと教えていただいたことがあるから少しは語ってもよいかと思う。音楽では、とりわけモーツァルトがお好きだったが、いわゆる一辺倒とは違って、ここでもまた悠容迫らざる愛好家ぶりが発揮されていた。だから、その裾野は途方もなく広がったのだ。私があるとき、仕事の必要から、当時まだ日本ではろくなレコードの出ていなかったマスナーのある歌劇についてお尋ねしたら、それなら持っているから貸してあげる、と言って、珍しい輸入ものの全曲盤を大学まで持って来て下さった。あとで聞くと、小川町にある輸入盤専門のレコード店の常連であられた由だが、それにしても、こんなものまでが二つ返事で出て来るとは、いったいどれほど幅のひろいコレクションをお持ちなのか、見当もつかなかった。

ときおり挨拶がわりに、最近は何かよい演奏を聴きましたか、と言われることがあったり、昨日のFM放送で流れたバッハの受難曲はすばらしかったね、と話しかけられることがあったりした。あいにくこちらが聴いていなかったりすると、テープに録音しておいたからコピーを取ってあげようか、と言われ、そうやって羽根田さんからいただいたテープが何本か、いまでも私の手もとにある。一度か二度はこちらから下手なコピーを差し上げたこともあったかと思うが、そんな具合に音楽の上でのお付き合いをするのは楽しかったし、言葉ではうまく言いあらわせない親近感のようなものが通うのだった。

モーツァルトがお好きだったのは、多分あの、天衣無縫の響きの流露を愛されたのだろう。その証拠に、あるときカール・ベームの演奏ぶりについて、糞まりの音楽だね、という評語を洩らされたことがある。むしろ感覚的には、ラテン系の演奏家によるモーツァルトの、ある種の甘美さもしくは繊細さに共感されていたのではあるまいか。羽根田さんの演奏批評は、そんな風に言葉数は少ないのに的確だった。

オーディオ機器については、もはやこちらが一方的に教えてもらうだけだった。わが家にあるアンプも、レコード・プレイヤーも、カセット・デッキも、すべて羽根田さんに相談して買ったものばかりである。そういうとき、羽根田さんは、こちらがどんなものを求めたがっているかを丹念に聞き取って、しかるべき機器を推奨され、それが安く買える店を紹介さえしてくださった。この方面での該博な知見も、一度相談に乗っていただいた者にはよくわかる。

いまでも私はときどき音楽関係の仕事をすることがあり、あまり人の聴かない曲を調べたりする場合もないではないが、そういうとき、これも羽根田さんならご承知だろうな、とか、これはさすがの羽根田さんもご存じあるまい、などと考えるのが、ひそかな楽しみになっている。と言っても、そういうとき、早速にもそれを吹聴してお目にかけたい羽根田さんは、もう会えないところへ行ってしまった。